

# オーバーロード 死の超越者と龍の騎士

ぷりまはむ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

オーバーロードの二次創作物です。

このような小説など今まで一切書いた事はありません…

他の作者さんたちは凄いですね、皆さんとても面白い。

ですので文章も幼稚で酷いものではありませんが、暇つぶしにでも読んで頂けるとありがたいです。

内容としては小説をベースにオリジナルな要素を盛り込んでいく予定ですが捏造多数となる予定ですので何卒ご容赦下さい。

目次

プロローグ	1
第1章 ナザリツク最後の時	5
第1章 異変	14
第1章 階層守護者1	21
第1章 階層守護者2	31

## プロローグ

何時からだろうか。

ゲームに胸躍るようなときめきを感じなくなったのは。

日々の仕事に追われ、自然とゲームにかける時間も減っていた。

いざやろうとしてもイマイチ気分が乗らない。

ソフトを購入するだけして、部屋の片隅の棚の上に無造作に重なっていく。

所謂、積みゲー、というやつだ。

そんなある日の就業時、最近同僚がやたらと欠伸をしている事に気がつく。

「最近やたらと眠そうだけど、ちゃんと寝てないのか？」

デスク上のモニターを凝視し、側からみたら仕事をしている風ではあるが、絶えず欠伸をしておりも今にも寝落ちしてしまいそうだ。

「いやさ、ちよつとゲームにハマっててさあ…」

そう答えた同僚は言ってる側からまた欠伸をしている。

「流石に仕事に支障がでるのはマズイだろ…」

「そうなんだけどさ、マジで面白くて、昨日も…」

同僚はそこから昨日はギルドのメンバーとダンジョンに籠り、何々を狩ってたら未発見のアイテムがドロップしたなどと、さつきまでは魂が抜け切った人形のような状態だったのが嘘かのように目を輝かせて延々と話していた。

ここまで熱く語られるとゲームに興味を失っていた自分でも少し気になってくる。

「そこまでハマるなんてすごいな、ちよつと興味が湧いてきた。」

「お前もやってみろよ！ユグドラシルってゲームなんだけど、一緒にやろうぜ！俺のギルドのメンバーも紹介するしさ！」

「これで準備は出来たかな。って結構初期投資で金がかかったな…」

「まあ他に趣味も無いし、金の使い道も無いからいいか。」

話を聞いた日の会社帰り、同僚に無理やりショップへ連行されユグドラシルをプレイするために必要なコンソールなど一式を無理やり買わされた。

まあ、興味も全くなかった訳ではないから無理矢理という事でもないかもしれない。

いざログインし、自キャラの名前を決め、キャラクターメイキングの画面に移動し、そのクリエイトの自由さに驚く。

「おいおいおい…こんなに細かく設定できるのか…」

大体この手のゲームのメイキングは数パターン雛形があり、その中で気に入ったものを選び、キャラクターを作成していくのが主だがユグドラシルのメイキングの自由度は常軌を逸しているレベルだ。

そんな中で悪戦苦闘しながらもなんとか自分が納得いくキャラクターを作り上げる。

「キャラ作るのに3時間も経ってるわ…」

ここでユグドラシルを勧めてきた同僚へキャラを作った事をメールで伝える。

「おー！キャラ作ったんだな！自由度半端ないだろ笑」

「で、種族は人間種にしたんだよな？」

同僚からはユグドラシルの種族人口は圧倒的に人間種が多いと聞いている。

始めは言われるまま人間種で始めようと思っていたが、メイキング時に異形種と呼ばれる種族も多数存在し、また選択できる事を知る。

「まあ、リアルで人間だし、ゲームでも同じ種族にしてもつまらないかもしれない。」

種族をスクロールしていくと、龍人なる種族が目止まる。

ふと以前やったレトロゲームの事を思い出す。

「確か昔のシミュレーションRPGのゲームのユニットに龍の騎士がいてカッコ良かったよな…」

そんな事を思い出し、種族は龍人に決めた。

「なんで人間種にしないんだよ…絶対に苦勞するぞ…」

「今から人間種で作直させて」

「いや、面倒くさいし、結構満足いくキャラが作れたから。つてかもうインしてるんだよ。笑」

同僚の助言を聞いておくべきだったのか。柄にもなくワクワクしていた気持ちはどん底まで叩き落される事となる。

所謂ゲーム開始時の初期村と言われる所までは良かった。作り込まれた街並みやフィールド、そして個性豊かなNPC達。ただただ驚愕していた。

もうこの時点でユグドラシルの世界観に魅せられていたと思う。しかし、初期村周辺でレベルを少し上げ、次の街へ移動しようとしていた時である。

上級プレイヤーからPKと呼ばれる被害にあったのだ。こちらは始めて間もない弱小キャラだ。

既存プレイヤーの攻撃に太刀打ちできるはずもない。

一撃でHPを削られ、広大な草原に崩れ落ちる。  
「!???」

訳がわからないまま呆然としてしていると笑いながら2人の人間種のレンジャーが現れた。

「おいおい、弱過ぎだろ笑」

「だな笑 雑魚過ぎ笑」

同僚が苦勞するぞと言っていたのはこの事かと。

現在のユグドラシルでは異形種狩りと呼ばれるPK行為が平然と行われ、それが流行しているという事だった。

しかもタチの悪い事に面白半分で異形種を選択した初心者プレイヤーを標的とする極悪ギルドもあるそうだ。

「始めて早々これか…」

久し振りにゲームに熱中出来そうな予感があったのに、気分はもう最悪である。

そんな時、自分の骸を上から優越感に浸りながら眺めていた2人の

内の1人に閃光が突き抜ける。

バチツという音を立てさつきまで高笑いしていたはずが、ドサリと自分の横に崩れ落ちた。

「え？」

残った1人のレンジャーは自分の索敵スキル（危険察知）に全く反応がなかったのにも関わらず、仲間が一瞬で倒された事に驚愕し、狼狽し始める。

その刹那、レンジャーの体を白く透き通った刃が心臓を一線に貫く。

「ぐがあ……」

無様な声を上げながら残りの1人のレンジャーも崩れ落ちた。

「全くこんな初期村でもPKするなんて、腐れ外道が……」

「本当ですね、たっちみーさん。」

「あ、今蘇生させますのでホームポイントには飛ばなくていいですよ。LV10以下はデスペナルティーはありませんけどね笑」

そこに立っていたのは眩いくらいに美しい白銀の鎧を身に纏った聖騎士と死がそこに降り立ったかのような禍々しさを放つ骸骨の魔法使い。

これが自分と異形種ギルド、アインズ・ウール・ゴウンとの出会いだった。

## 第1章 ナザリック最後の時

当時のサイバー技術とナノテクノロジーの粋を結晶し作り上げられたオンラインゲーム、DMMO-RPG ユグドラシル。

その異様なまでの自由なプレイスタイルやユーザー自身にて作成可能である膨大なグラフィック等、ゲーマーが熱中熱狂したタイトルである。

自分もそんな中の一人だった。

会社の同僚から勧められ物は試しにという軽い気持ちで始めてみた訳だったが……

同僚と同じようにドハマリしてしまった。

いや、同僚よりハマってしまったと言っても過言ではないだろう。

インした初日に既存プレイヤーからPKされ最悪の気分を味わったものの、そこに現れたのは眩い白銀色の高貴なオーラを放つ鎧を身に纏った聖騎士と、その聖騎士とは全く正反対のそこに死が存在しているかのような禍々しい黒い負のオーラを放つローブに身を包む髑髏の魔法使いだった。

「初心者さんですかね？」

その死の魔法使いがその外見とは想像もつかない気軽さで自分に声をかけてきた。

「はい。今日から始めたのですけど、いきなり殺されてしまって……」

「今ユグドラシルでは人間種以外の種族のPKが流行ってますしね……」

「誰が始めたのかわかりませんが、許せる事じゃないですよ。」

白銀の鎧を纏った聖騎士は怒りを言葉に滲ませつぶやく。

「あ！お礼がまだでした。蘇生してもらってありがとうございます。いましました。」

「いやいやいや！ お礼なんていいですよ！ もうちょつと自分たちが早くここを通りがかっていれば未然に防げたんですが……」

申し訳ない。」

こちらが助けてもらったのに何故か頭を下げ謝る禍々しい髑髏の

魔法使い。

その見るものすべてが恐怖で凍りつきそうな恐ろしい外見とは裏腹に紳士的な物腰。

あまりのギャップに思わず笑ってしまう。

「ふはははー」

「え?？」

「いや、すみません。あの失礼ですが、その恐ろしい外見なのにほんと紳士的なのがツボに入ってしまったって笑」

「ああ笑」

「モモンガさんはうちのギルドのギルドマスターなんですよ。ひと癖ふた癖もあるギルドメンバーを纏めてるんですからほんとすごいですよ。」

白銀の鎧を身に纏う聖騎士はそう答えた。

「もう ベつにすぐくないですって。中身はただの凡人ですから。笑」

そんな感じでしばし時間を忘れて談笑する。

「では、本当にありがとうございます。いきなり心折れそうになりましたけどもうちょっと頑張ってみます。」

そうお礼を言い、その場を後にしようとした時。

モモンガと白銀の聖騎士は同じ事を思っていたのか、お互いの顔を見合わせた後に頷きこちらに再度声をかける。

「もしよろしければ自分たちのギルドに入りませんか?」

それからの日々は本当に楽しかった。

ギルドのメンバーと一緒にレベル上げをしたり、未踏破のダンジョンの攻略、レイドボスと呼ばれる各エリアにいるボス討伐に連れて行ってくれたりもした。

最初は足手まといではあったがゲームを続けていく内に少しずつではあったがギルドに貢献できるようになってきた。

またこのゲームには課金要素も多くあった為、特に趣味もなかった自分は金の使い道もなかったことから重課金することとなる。

「LV100到達おめでとうございます！ おいもさん！」

「おめでとう、おいもさん！」

「ありがとうございます。モモンガさん、たち・みーさん。」

「おー！ おいもたち、とうとうLV100になったかーおめでとう」

遅れて部屋に入ってきたペペロンチーノが嬉しそうにおいもに声をかける。

「ありがとうございます。ペペロンチーノさん。」

「これでナザリックの白と黒の盾は完ぺきだ。」

そう言うたち・みーの言葉にモモンガとペペロンチーノはうんうんと黙って頷いている。

白というのはもちろんユグドラシル上で5人もいないと噂される最強クラスの「ワールドチャンピオン」であるたち・みーの事だ。「ああ、たち・みーさんには遠く及びませんよ・・・でも少しでもこれで見なさんの役に立つことが出来るいいなど。」

自分はキャラクターを作成したとき某レトロゲームのキャラから漠然と龍の騎士を想定し、タンク職になろうと決めていた。

ただ、その後、ギルド・アイنز・ウール・ゴウンに加入したことから若干キャラメイキングの方向性を考え直すこととした。

純粋な防御力ではクラス最強であるワールドチャンピオンのたち・みーさんがいる。

攻撃力なら武人建御雷さん。

だったら攻防それぞれで役に立てるクラスはないものだろうか？ そう考えたのである。

そこで導き出されたクラスが暗君（シャドウルーラー）と言われる暗黒騎士から派生する最上級クラスだ。

主な特徴は物理攻撃時にドレインが付与され、攻撃対象のHPを吸収できる。

これによりオートトリジェネに近い自己回復手段を得ることとなる。

また前衛職でありながら魔力が高く、その魔力を消費することによ

り相手に対し、さまざまな状態異常を物理ダメージと共に上乘せすることができる。

代表される魔法としてスカージと呼ばれるものがあるが、これは対象に継続してダメージを付与するもので、シャドウルーラーまで登りつめた者が使用するとその効果は絶大で、継続時間も恐ろしいほど長い。

またナイトなどでは装備できない呪われた武具も装備可能である。

しかしながら防御力はワールドチャンピオンをはじめとする生粋のタンク職には遠く及ばず、物理攻撃力は魔力が高い分、物理アタックークラスより劣る。

さくつと言うと器用貧乏というやつだが、そこで龍人という種族が生きてくる。

龍人は初期レベルでははつきり言つて弱い。

龍人は1000年生きた後に転生し、その知識を継承した上で幼生体となり生をやり直すというのが基本設定だ。

そのため、初期レベルでも魔力や知力だけは無駄に高く設定されているものの、有効なスキルや魔法を初期では習得しない事から全く役に立たない。

だが中期から後期にかけて「真龍への目覚め」という種族ボーナスを得ることにより、HPの大幅な増加、物理魔法攻撃力上昇、物理魔法防御力上昇、低位物理魔法攻撃無効などのさまざまな恩恵を受けることができる。

これら様々な種族ボーナスにて少しでも欠点を補うことができると考えていた。

なお、種族レベルが最高に達すると本来の姿である龍への回帰も可能となるが、その際にはさまざまなステータスが劇的に向上する半面、武器防具などが一切装備不可能になるなどのペナルティを受ける。

「では次はおいもさんの神器級アイテム作成ですね」

「だなー！ アイテムは何が必要なんだっけ？」

「魂を喰らうもの（ソウルイーター）を作るのに必要な素材はま  
ず……」

モモンガが取りまとめ役となり、みんなでどこから行くかなど相談  
を始める。

楽しかった。

本当に楽しかった。

だがそんな時間も永久には続かない。

他のメンバーも現実世界の忙しさからなのか、徐々にイン率が減っ  
ていき、かく言う自分も昇進に伴う業務の増加などで

ユグドラシルヘインする時間がめつきり減り、やがては全くインす  
ることがなくなってしまう。

以前なら多少睡眠時間を削ってでものめり込んで遊んでいたユグ  
ドラシル。

しかし慣れない新たな仕事や上に立つ立場になった事。

さまざまな要因が影響し、ゲームをする気力と体力、そして情熱を  
奪っていった。

これはしようがないことなのか。

アインズ・ウール・ゴウンの加入条件の一つである「社会人である  
こと。」

生きるためには働かなければならない、それが現実である。

そんなある日のこと、ふと一通のメールが届いていることに気がつ  
く。

送り主はモモンガであった。

「モモンガさん！ 何年ぶりだろう、まだ覚えてくれていたんだ……」  
ユグドラシルを思い出し懐かしい気持ちになりながらメールを見  
る。

そこにはユグドラシルのサービスが明日で終了すること。

また忙しいとは思うが、是非最後にもう一度ナザリック地下大墳墓  
にギルドメンバー全員で集合しないかという内容であった。

ここはナザリック地下大墳墓9階層。

巨大な黒曜石で出来た円卓、それに併せて豪華な装飾が施された4脚の椅子。

そこに一人ポツンと寂しそうに腰かける黒い豪華なローブに身を包む髑髏の魔法使いがいた。

「へロへロさんも行っちゃったか。。本当に一人になってしまったな。」

この髑髏の魔法使いこそ、ナザリック地下大墳墓の支配者、ギルド・アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスター、モモンガである。

「しようがないよな・・・みんなそれぞれ生活があるんだから、ゲームばかりしていられる訳はない・・・」

「わかってる、わかってるさ・・・」  
「でもっ!!!」

豪華な黒曜石の円卓にモモンガの骨の拳が叩きつけられドンツ！と鈍い音が豪華な空間に虚しく響き渡る。

「・・・あの楽しかった日々はみんなにとってそんなものだったのかな・・・」

「いや、そんなはずはないよな。ごめん、みんな。」

ギルド・アインズ・ウール・ゴウンの加入条件の1つは社会人であること。

それぞれが社会人としてやるべきことがあり、みんな嫌でユグドラシルを去ったわけではない。

誰も悪くはないし、当然裏切った訳でもないのだ。

モモンガはぼんやりと豪華な室内を見まわし、ある一点の物を見つめる。

「スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」

眩い金色の光を発するその杖はギルド武器と呼ばれるユグドラシ

ルにおける最強の武器であり、世界級アイテムに匹敵するアイテムだ。

「こいつを作るのにはほんと苦勞したよなあ・・・」

このスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを作るために、最高クラスのギルドメンバーが集結し途方もない時間をつぎ込んだ。

あるものは仕事を休み、ある者は大切な結婚記念日を忘れインしてきた。

「本当に楽しかったよね。」

そう呟き、何か決めた様にスツと席を立つ。

「今日で最後だし、支配者として相応しい格好で最後を迎えよう。あくまでこれはギルドみんなの物だけど、今日くらいはギルマス権限発動して持ち歩いてもいいよね?」

もちろん答える者はいる筈もない。

モモンガはその壁に掛かった黄金の輝きを放つ杖に手を伸ばす。

するとスツとモモンガの手に吸い付く様に収まると禍々しい漆黒のオーラが杖から溢れ出す。

「エフェクト凝り過ぎ笑」

アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーはやたら凝り性な人間が集まっていた。

自室を改造する者、ナザリック内に豪華な温泉施設を作ってしまう者、武器や防具、または家具など作る者、そしてナザリック内に配置出来るNPCと呼ばれるキャラクターに並々ならない情熱を注ぐ者。

鬼の様にみな課金をしまくり、ギルド内で発表してはその反応を楽しんでいた。

「さて、時間もあまりないし行くか。」

そう、最後を迎えるに相応しい場所、王座の間へ。

王座の間へ行く途中、通路の端で支配者が通り過ぎるのを敬意を込め頭を下げ見送るNPC達がいた。

その先頭は一部の隙もない様子でモモンガを見送る執事のセバスチャン。

その後ろには全員絶世の美女と言っても過言ではない戦闘メイド

のプレアデス達だ。

「こんな通路で最後を迎えるのはあんまりだよな…」

「よし、みな付き従え。共を許そう。」

王座の間に到着すると絶対的支配者であるモモンガへの敬意を表す為、スツと横に並び跪き頭を下げる。

モモンガは満足気にセバス達を見渡し、その豪華な玉座に腰を下ろす。

その横にはナザリックの守護者統括NPCであるアルベドが微笑みながら主を見守っている。

「確かタブラさんが作ったんだよな、アルベドって…」

設定魔であったタブラさんがアルベドをどの様な設定にしたのか何と無く気になった。

「サーバーダウン迄は5分位あるし、ちよつと見てみるか。」

モモンガはコンソールを開き、アルベドの項目を開く。

すると…

「うげえっ…なんだこれ?、長っ」

膨大な量の設定が画面に表示される。

これを全部読んでいたらサーバーダウンの時間を越してしまいそうであった為、スクロールしていた指を離そうとした時最後の一行に目が止まる。

「なおビッチである。」

「え?? ビッチってあのビッチだよな…流石はギャップ萌えの属性をも持つタブラさん…」

「でもこれは流石にあんまりだよなあ…」

そう呟くとモモンガは申し訳ない気持ちも感じつつもその一文を消去した。

「空白のままってのもなんだか気持ち悪いし…」

未だ微笑みながら絶対的支配者であるモモンガを見つめているアルベド。

思わずモモンガは恥ずかしくなり目を反らす。

「こうして見るとやっぱり綺麗だよな、アルベドって…よし…」

何かを決意したように空白を埋めていく。

消された一文の代わりにこう書かれていた。

「モモンガを愛している。」

「うわああああああああ!! やっぱりダメだ! 無し無し無し!! 恥ずかしすぎるう!」

自分で書いておきながらあまりの恥ずかしさに悶絶し頭を抱えるモモンガ。

「ダメだよな、やっぱり。うん、空白のままにしておこう。」

書き加えたその恥ずかし過ぎる一文を再度消去しようとした時に思いがけない事が起こった。

「最後ですし、そのままでもいいと思いますよ、モモンガさん 笑」

「え???」

全く想像していなかった、でもモモンガにとっては最高の不意打ちであった。

## 第1章 異変

「え?」

全く予想もしていなかった事態が起こりモモンガは狼狽えながらもその姿を見て歓喜の声を上げる。

「お…おいもさん? おいもさんなんですか!? 来てくれたんですね!!」

三メートル程はあると思われる巨軀に頭からは二本の角、更に耳の辺りからも長く立派な長い角が二本伸び、口からは鋭い牙が覗く。

また黒く艶やかな強固な鱗に覆われた長く伸びる尻尾には六つの棘が飛び出しており弱き者など簡単に引き裂いてしまいそうな力強さが窺える。

身体を覆う金色に縁取られた漆黒の全身鎧、まさに暗黒の龍騎士といった出で立ちであった。

比較的後期にギルドへ参加したものの、その後中心メンバーの一人となつていつたかつての仲間、龍人のおいもがそこに立っている。

「モモンガさんお久しぶりです。そしてすみません。もう少し早くインするつもりだったのですが…アップデートやらなんやらでギリギリになつてしまいました。」

そう言うとモモンガに向かって頭を下げる。

「謝らないでください! おいもさん! 来てくれただけで本当に…本当に嬉しいですよ!」

ユグドラシル上では泣くことは出来ない。

しかしながらモモンガは鈴木悟は本当に涙を流すほどかつての仲間との突然の来訪を心から喜んでいた。

現実世界において親しい友人、また恋人もおらず、両親もすでに他界している。

仕事もただ生きる為に行っているに過ぎず、やり甲斐などはこれっぽっちも感じてはいない。

モモンガⅡ鈴木悟にとつてはユグドラシル、ナザリックの仲間達が全てであり、ナザリックで過ごしてきた日々はかけがえのないものだった。

「でもいつたいどうやってここへ？ 全く気がつきませんでした  
が・・・」

通常であればギルドメンバーやフレンドなどがユグドラシルへログインすると画面上にログが表示される。

「いや、モモンガさんがうああああ!!とか頭を押さえながら玉座の横でのたうち回って悶絶してる時にあちらの扉を開けて普通に玉座の間に入ってきたけど笑」

「ええええええ!!?!?!? ぜ、全部見えました、よね??」  
「見てましたよ!!笑」

は、恥ずかし過ぎる…モモンガⅡ鈴木悟はリアルで顔全体を真っ赤に染める。

穴があつたら入りたいとはこの事か…

「つてもう時間がありませんね、モモンガさん。」

おいもに声をかけられ、恥辱の海に沈み込んでしまった意識を急速に立て直す。

「はい、なんででしょう？ おいもさん。」

「モモンガさん、自分はモモンガさんやアインズ・ウール・ゴウンのメンバーの皆さんのおかげで本当に楽しかった。始めた初日にPKされ、モモンガさん達にそこで出会わなければきつと直ぐにユグドラシ

ルを辞めていたと思います。」

「あなたたちがいたからこそ、ここまで熱中出来たんです。でもその後仕事の都合などでイン出来なくなってしまうた事、本当に申し訳なく思っていました…」

おいもはモモンガへ再度深々と頭を下げる。

「ちよっ！ おいもさん、やめて下さい！ アインズ・ウール・ゴウンは社会人ギルド、現実世界での生活が一番の優先事項なんです。それはわかってますから謝らないで下さい。」

「はい…ではこれだけは言わせて下さい。モモンガさんありがとうございます。アインズ・ウール・ゴウンを今まで守ってきてくれて本当にありがとうございます。ありがとうございました。そして、お疲れ様でした。」

鈴木悟は泣いていた。

無駄では無かった。

その思いが全身に込み上げる。

たかがゲームだ。

側から見たら気持ち悪いと思われる事であろう。

だが鈴木悟にはこれが全てなのだ。

「最後にどうしてもお礼が言いたかったんです。間に合って本当に良かった。」

時刻は既に23時59分を回っていた。

サーバーダウンの時間は24時である。

おいもはモモンガに手を差し出し、モモンガは感極まり震えてしまっている手で固く握手する。

「おいもさん、こちらこそ、ありがとうございます。本当にありがとう…」

栄光の時間は永遠には続かない。

必ず終わりが来るのだ。

そして二人は目を閉じ、ユグドラシルの終わりの時を待つ…

23時59分55秒…56…57…58…59…0…1…



「何か私共に不備がございましたでしょうか…?」

不安そうな顔をしこちらを真つ直ぐ見つめるアルベド。

このまま二人揃って狼狽えているのは流石にマズイと判断したモモンガは咄嗟のアドリブでアルベドに声をかける。

「っん、あ、えつと、オホン、アルベドよ。少々このナザリックで問題が生じているようだ。」

(さすがモモンガさん！ ロールプレイはお手の物ですね！)

「も、問題でございますか!!それであれば私共にて直ぐに解決致します。ご命令を！」

ゲームの中のキャラクターと会話が成立している…こんな馬鹿な事ある訳がない。

しかし目の前で起こっている事は紛れもない真実なのである。

(つく！ もうどうにでもなれっ！)

「セバスよ！」

「はっ！ モモンガ様。」

「どうやら問題が生じているらしい。プレアデスから1名連れて行き、地表に出て周辺地理の確認をせよ。範囲はナザリックから半径1キロとする。なお何らかの知的生物がいたら連れてくるんだ。ただし戦闘は極力避ける。戦闘が避けられないような状況であればプレアデスをこちらに戻して状況を伝えさせろ。」

「はっ！かしこまりました。モモンガ様。」

「念の為、残りのプレアデス達は八階層から上を警護させた方が良くかもしれません。」

おいもがモモンガに提案する。

「確かにそうですね、うむ。今おいもから聞いた通りだ。セバスと共に行かぬ残りのプレアデス達は八階層まで上がり周辺の警護にあれ。」

「かしこまりました。モモンガ様。おいも様。」

「では直ちに行動を開始せよ！」

「はっ!!」

一同一斉に頭を下げ、スツと立ち上がると行動を開始する。

「ふう、これで取り敢えずは大丈夫ですかね。」

深い息を吐きながらおいもに声をかける。

「モモンガさん、アルベドはどうします?」

まだ命令を与えられてないアルベドはジツとこちらを見つめている。

「ん?」

「ここでおいもがある事に気がつく。」

こちらを見つめているアルベドの瞳が潤んでいるような…

いや、正確にはモモンガを見る目が潤んでいる。

「モモンガさん、なんかアルベドの様子がおかしいような気がするんですけど…」

「え? 本当にですか? どうかしたか、アルベド。」

そう言いながらモモンガがアルベドに振り返るとビクンと体を震わせその白く美しい顔を真っ赤に染める。

「い、いえ、至高の御方であるおいも様の帰還という大変喜ばしい事があつたばかりか、モモンガ様の支配者たる圧倒的な存在感を目の当たりにし、私めの身体が火照ってしょうがないのです…ああ…さすがはモモンガ様…私の心より愛するお方…はあ…はあ…」

甘い吐息を吐き出しながら何やらブツブツと呟いている…

完全に妄想に取り憑かれているようだ。

「お、おい…愛するお方って…あっ!!」

モモンガはすっかり忘れていた。

何気なくアルベドの設定を見返していた時に発見したあの一文。

「なおビツチである。」

それをこのままでは可哀想だと消去し、軽い気持ちで書き換えたあの一文の事を。

「モモンガを愛している。」

(そうだった…書いた後に消そうとしてたらそこへおいもさんが現れて、そのままサーバーダウンの時間に…消せないまま上書きされてしまったのか…)

「おいもさん…どうしましょう…俺の勝手でタブラさんが精魂込めて作ったアルベドの設定を変えてしまったようです…」

なるほど、あの事によってアルベドがこんな事になってるのかとおいもは納得する。

「まあ、でもいいんじゃないですかね。タブラさんギャップ萌えですし。主人を好きかと思いきやモモンガさんを愛してるなんてなかなかのギャップかと。笑」

「良くないですよ!! はあ…どうすれば…」

「まあまあ、とにかく今はアルベドに指示を与えて二人で今後の事を相談してしましょう。アルベド! 愛しき主人からの命があるぞ。一語一句聞き逃す事がないように。」

「はい! おいも様!」

妄想から帰ってきたアルベドはモモンガの命を待つ。

「ちよつと! おいもさん、また面白半分でそんな事を言っ…もう…ゴホン、では、アルベド。」

「はい! モモンガ様、何なりとお申し付けくださいませ。」

「第四、第八階層を除く各階層守護者を今から一時間後、第六階層のアンフィテアトルムに集まるように伝えよ。それとおいもの帰還については伝えなくても良い。私自身の口から皆に伝えようと思う。」

「かしこまりました。直ぐに行動致します。」

命令を聞き終えると二人に頭を下げアルベドは玉座の間を後にした。

「やれやれ…」

考えなくていけない事は山積みであった。

## 第1章 階層守護者1

自分達以外誰もいなくなった玉座の間。

この非常事態をどのように乗り切るのか、話し合わなければならぬ。

まずモモンガから自身が考えた可能性を話始める。

「サーバーダウンの時間を契機に新たなサービス、例えばユグドラシル2が始まったとか？」

「いや、それはないでしょう。まずコンソールが表示されませんし、GMコールも出来ない。ましてや任意ログアウトができないなんてありえませんよ。」

「おいもがそれを否定する。」

「ですよねえ・・・そうするとやはりこれはユグドラシルというゲームが現実になった？」

「まったく馬鹿げた話である。ゲームが現実になる。」

「しかしながら現在置かれている状況を説明するにはこれしか考えられないのだ。」

「本当にありえない話ですが、そう考えるしかないと思います・・・実際に自分たちはゲーム内のキャラと会話が出来てしまってますし・・・」

「おいもも戸惑いながらもモモンガの考えを肯定し更に話を続ける。」

「問題なのは今後どうするか。どうすれば元の現実世界に帰れるの

か、それを探さない」と。

ここでふとモモンガは考える。

現実世界に自分は帰りたいのだろうか。

確かにこのようないない状況になり驚いた。

だが現実の世界に未練を残すような事が実際のところないのだ。

友人、恋人、家族などがいたのであればきつとどんな方法を用いても帰ろうとしたであろう。

だがモモンガと鈴木悟にはそれがなかった。

(ふふつ…寂しい人間だよな…俺って…でもおいもさんは別だ…きつと現実世界に大切な人や事があるはず。この気持ちは打ち明けるべきではない…)

そう考え、話を続ける。

「ですね。セバスに確認に行かせましたから何かしらの情報を得られるといいのですが。」

「モモンガさん、ちよつと気になってるというか、心配している事があるんです。」

「何ですか?」

おいもは言葉を続ける。

「先程までここにいたセバスやプレアデス達は我々の命令に従順なようでした。しかし他のシモベ達や階層守護者も我々の言う事を聞いてくれるのでしょうか? まあ…守護者統括のアルベドがモモンガさんを愛していますし、トップがこちら側にいるということは最大のアドバンテージではあるのですけど…」

「あああああ…」

アルベドの件を思い出し再び強い後悔の念が雪崩の如くモモンガに押し寄せてくるが、フツと心が落ち着く。

「ああああ…つて、ふう…あれ??？」

「どうしました??？」

「いや、勝手に設定を弄ったのを物凄く後悔してるんですが、強制的に心が安静化されたというか…」

「それってもしかしてアンデット特有の精神効果無効のパッシブスキルとか!？」

アンデットには精神に影響を及ぼす攻撃に対して耐性がある。

魅了、混乱等様々なものがあるが、アンデットの最上級クラスであるオーバーロードのモモンガにはこのような精神攻撃は一切通用しない。

「変な事を言うようなんですが、体の全てが馴染んでる感じがしません？はじめからこの体だったというか…もちろん人間ですから尻尾なんかある訳ないのに、尾の先まで神経が研ぎ澄まされてるような…モモンガさんもそう感じてはいませんか？」

「ええ…実は俺もです。この体で何が出来るのか感覚的に理解してる…。」

「魔法はどうでしょうか？ そうだ！ 伝言《メッセージ》が使えれば誰かしらと連絡が取れるのでは!？」

「確かに！ 試してみます。」

現在はコンソールは表示されない為、そこから魔法を選択する事は出来ない。

だがモモンガにはどのようにすれば良いのか、ハッキリと理解出来ていた。

意識の糸を相手に繋げるようにイメージし、相手の仲間達へ連絡を試みる。

「くっ…ダメです、メッセージは使えてると思うんですが、反応がないですね…」

「そうですか…あ！モモンガさん、一度自分にもメッセージ送ってみて貰えませんか？」

「わかりました。」

するとおいもの頭の中で神経の糸が何かと繋がるような、不思議な感覚に襲われる。

《おいもさん、どうでしょうか？ 聞こえますか？》

《モモンガさん聞こえてますよ！ お互いに口は動いてないようですから、間違いなくメッセージの魔法は有効ということですね！》

その後なんとか運営側にメッセージが送れないかと試してみるが繋がる事はなかった。

「口に出せないような事はメッセージを使って連絡しましょう。自分はメッセージの魔法は使えないので手持ちのスクロールを使いますね。って所持してたアイテムってどうなったんだろう…？」

過去に所有してたアイテムを思い出しながらおいもは空中に手を伸ばしてみる。

!!!

その伸ばした手の先に僅かな空間が広がり、その中にアイテムが綺麗に整頓されている様子が映し出された。

「アイテム、どうやら無事なようです笑」

空中で指をスクロールすると武器や防具、消費系のアイテムなどが次々とアイテムが現れる。

「アイテムも無事、魔法もどうやらこの世界では有効なようです。最悪守護者達やシモベが反旗を翻したとしてもモモンガさんだけはないとしても守ってみせますよ！」

おいもの心強い言葉にモモンガは深く感銘を受ける。

この状況に一人で置かれていたらどうなっていたことか。

仲間がいるという心強さを改めて感じる。

「ありがとう。おいもさん。ただ自分だっておいもさんを守りたいです。なので攻撃魔法もどこまで使用可能なか確認しなければ。」

「それで第六階層のアンファイテアトルムですか！確かにあそこであれば魔法など試せますね！」

「はい、ただメッセージは有効だということは確認できましたが、攻撃系の魔法はまだわかりません。油断せずに行きましょう。あそこの階層守護者は確か・・・」

「ぶくぶく茶釜さんが作ったアウラとマールですね。」

ナザリック地下大墳墓第六階層。

ここは階層全体がジャングルとなっており、高さ二百メートルの天井には“空”が広がる。

ナザリックの運営管理システムによって天候の変化までもが設定してある為、晴れ、曇り、雨など天候が変化する。

しかしながらここは地下であり、野外ではない。

この階層を作り上げた者の並々ならぬ情熱と執念を感じる。

またここにはアンファイテアトルムという円形の施設があり、以前ナザリックへ1500名というユグドラシルユーザーによる大侵攻が行われた際、囚われた捕虜はここでみな処刑された場所でもある。

そのアリーナへと繋がる通路の空間が一瞬歪み、二つの影が現れ

る。

「転移も問題なくできましたね。」

「このリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンが使えなかったらナザリック内の移動が面倒なことになりますし、使えて良かった。」

そこに現れたのは至高の41人と呼ばれるナザリックの支配者、モモンガとおいもであった。

本来ナザリック内では特定個所以外の転移は不可能となっている。

しかし、リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン、この指輪を装備する者に限っては回数制限無しに自由にナザリック内を転移する事が出来る。

「さて、では行きましょう。おいもさん。」

「わかりました。」

二人はそれぞれ持っている武器に力を込め、そしてそのままアリーナへ向けて歩き出す。

目の前の重厚な鉄の柵はモモンガ達が前に来ると、スツと重さを感じさせず上部へスライドし、目の前に4キロメートル四方の円形のアリーナが眼前に広がる。

観客席は魔法生物であるゴーレムで埋め尽くされており、その一角に貴賓席がある。

ここでギルドメンバーがナザリックへの侵入者を戦わせ、その様子を楽しんだりしていた。

「モモンガさん、自分が先に入ります。不測の事態が発生した場合は俺が食い止めますので先に転移して逃げてください。」

「逃げるだなんて、俺も戦いますよー！」

「ふふ、そう言うと思いました。では盾はお任せください。たち・みーさんには及びませんがこれでもナザリックの黒の盾と呼んでもらってましたからね。」

「はい！ よろしくお願いします！」

そして先ずはおいもがアリーナに足を踏み入れ、その後にモモンガが続く。

「見られてるな。」

おいもがそう呟くと「とうっ！」と声が響き、貴賓席から黒い影が跳躍する。

黒い影は軽やかにアリーナへ降り立つところらへ向かって猛スピードで駆け寄ってきた。

その黒い影の正体はナザリック大地下墳墓、第六階層守護者、アウラ・ベラ・フィオーラである。

「ザザザッ!!」

一気にその距離を詰め足で急ブレーキをかけるがとてつもないスピードで駆け寄って来ていた為、大地が砂煙を上げ削れていく。

しかし、その砂煙が二人に届かないようにアウラは当然計算しているだ。

「おいも様!!! ナザリックにお戻りになられたのですね！ おかえりなさい!! モモンガ様、おいも様、私たちの守護階層にようこそおいでくださいました！」

どうやらいきなり襲ってくることはなさそうだとおいもは胸をなでおろす。

「うむ、今戻った。勝手に留守にして心配をかけたな。本当にすまなかった。」

「そ、そんな！ おいも様が謝る必要なんてありません！ 戻って来ていただけただけで私は嬉しいです！」

「そうか」

そう言い優しくアウラの頭を撫でる。

えへへ、と頬を赤らめながら無邪気な笑顔をおいも、そしてモモンガに向ける。

(かわいいなあ・・・)

二人の様子を見つめモモンガは思わず微笑んでしまう。

肩口で切り揃えられた黄金に輝く髪、瞳は緑と青で左右違う色に輝いている。

耳は長く尖っており外見は10歳位の幼いダークエルフだ。

しかし忘れてはいけないのはこのように可愛い外見をしているが強力な幻獣や魔獣を使役するビーストテイマーでありレンジャーなのだ。

《モモンガさん、危険察知には反応はありません。どうやら大丈夫なようです。》

《はい。アウラの様子を見ていても反旗を翻しそうな雰囲気はありませんよね、良かった・・・》

ナザリツクの仲間達が心を込めて作ったNPC達だ。

自分たちにとっても自分の子供のようなもの。

やはり戦いたくはない。

「そういえばマーレはどうした？」

モモンガは辺りを見回すがアウラの弟であるマーレの姿がない。

その言葉を聞きアウラはくるっと振り返り、貴賓席の方へ向けて声を上げる。

「マーレ、早く降りてきなさい!!! モモンガ様がお待ちよ! それに

おいも様がお戻りになってるんだから！」

すると貴賓席の暗がりでも何やらもぞもぞと動く影が見える。

「わ、わかつてるよ、おねーちゃん．．．でもここから飛び降りるなんて無理だよ．．．」

「そんな臆病な事でどうするの！ あんたも階層守護者なんだからちゃんとしなさい！ 飛び降りないなら私が蹴飛ばして叩き落とすわよ？」

「!!!」

そのアウラの鬼のような言葉に観念したのか、「えいつ」と可愛い言葉と同時に貴賓席から飛び降りるマーレ。

もちろん飛び降りたからといってケガなどする訳はない。

アウラと同じでマーレもLV100のNPCなのだから。

アリーナへ飛び降りると、杖を大事そうに胸の前で両手で抱えながらたてたてとかけて来る。

「お、お待ちせしました。モモンガ様。 お、おいも様おかえりなさい。」

《モモンガさん、マーレって確か男の子でしたよね？ その、スカートを履いてますが．．．》

《あああ．．．これは、その．．．ぶくぶく茶釜さんの趣向でして、いわゆる『男の娘』というやつでして．．．》

《こっ．．．これが噂に聞く男の娘というやつですか!!》

おいもをここまでうろたえさせている『男の娘』、名はマーレ・ベロ・フィオーレ。

姉のアウラと共にナザリツク地下大墳墓、第六階層守護者である。

外見はアウラとそっくりで、お互いに竜王鱗の革鎧を身に纏っているが、アウラは赤、マーレは緑とそれぞれ色が異なる。

そして製作者、ぶくぶく茶釜の趣向によりスカートを履かされ”男の娘”として設定されている為仕草はもう女性そのものだ。

姉には逆らえずいつもおどおどとしているが、その魔法詠唱者としての能力は非常に高く広範囲攻撃を得意とする。

「まあ そんな苛めてやるな、アウラよ。」

「でもモモンガ様、この子ったら本当にどんくさくて・・・」

そう言うとギョツとマーレの尖った耳を引っ張る。

「痛いよお おねーちゃん・・・」

「ところでモモンガ様、おいも様、階層守護者集合の時間より少し早いですよね?」

「ん、そうだな。それには理由があつてな。お前たち二人にちよつとこいつの実験に付き合つて貰いたいのだ。」

そう言うとモモンガは右手に握っていた杖を宙にかざした。

「その杖はもしかして!!!」

## 第1章 階層守護者2

『スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン』

七色の水晶の蛇が絡み合う神器級のギルド武器。

それぞれが伝説級の色の異なる宝石を啜え各種属性に応じた様々な特殊効果をもたらす。

このギルド武器が破壊されることはギルドの崩壊を意味する。

「それが噂に聞くモモンガ様しか触る事を許されないと言う神器級の武器なのですね…」

「と、とても凄い魔力を感じますう…」

アウラ、マール共に感嘆の声を上げた。

「そうだ、少々こいつを試したくてな。」

今回モモンガが試そうと思っていることは二つある。

まず一つ目の最重要事項である自身の攻撃系魔法の発動実験。

メッセージについては問題なく使える事が確認出来ている。

しかし攻撃系の魔法についてはまだ試しておらず、もしも使えないとなると…モモンガは魔法詠唱者、最大の武器を失う事になり加えて今は忠誠を誓ってくれている配下の者達が反旗を翻す恐れもある。

そして二つ目、まあこちらは主たる目的をカモフラージュする為の建前的なものであるがギルド武器、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの性能の確認。

(よし、では攻撃魔法の発動実験から行こうか。)

「アウラ、マール。すまんが魔法の標的となる物が必要だ。何か用意出来るか?」

「はい! モモンガ様、今すぐにご用意致します!」

アウラが手を挙げ元気よく答えると、アンファイテアトルムの警備員兼掃除要員のワーウルフへ藁人形を持ってくるように指示を出す。

掃除要員といっても50レベルは越えるため、生半可かな冒険者などは容易くその鋭い牙で引き裂かれるであろう。

1体、2対と藁人形が設置されていく中、モモンガはユグドラシルで使っていた魔法を思い浮かべた。

(ふっふははは！・・・わかる！その魔法の効果、詠唱速度、威力、リキャスト時間、頭の中に全て浮かんでくる！)

今まで感じたことのない高揚感、そして充実感に襲われ思わず笑みをこぼす。

そして数ある魔法の中の一つを選択し、藁人形に意識を向け魔法を発動する。

〈焼夷弾ナパーム！〉

藁人形に向けた指先から炎の球が現れ、そのまま藁人形に着弾し同時に激しい炎を発しながらゴオウツ！！と音を立てて焼夷弾が弾け飛ぶ。

一瞬にして藁人形は消し炭となるが横で作業をしていたワーウルフにも焼夷弾の影響が及び、「グウウウウ」っと声をあげる。

「む！ フレンドリーファイアが有効になっているのか!? なるほど・・・その辺りも考慮し使用しなければいけないな・・・」

その後何個かの魔法を試し、満足したように頷く。

《モモンガさん、どうやら問題なようですね。》

《はい、この調子であればどの魔法も問題なく使えそうですよ。ただユグドラシルより効果が上がっているようですのでその辺りは少し気をつけないといけないかもしれません。》

おいもにそう答えると次の実験に移るモモンガ。

次はスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンの性能確認である。

「さて、アウラ、マールよ待たせたな。スタッフ・オブ・アインズ・オー・ル・ゴウンの力、とくと見よ！」

(やつぱりある程度は派手な方がいいよな・・・よしあれにするか！)

スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンにはそれぞれが伝説級の宝石が七つ組み込まれており、能力の一つとしてその宝石の属性に対応した最上位に近い元素精霊(エレメンタル)を召喚することがき、召喚されたエレメンタルはレベル80後半という強力なモンスターだ。

「出ですよ!! 根源の火精霊召喚(サモン・プライマル・ファイヤーエレメンタル)!!!」

対応した火の宝石から紅蓮の炎が立ち上がり、その瞬間周囲に熱風を巻き起こす。

その紅蓮の炎は周囲の空気を食らいながらその熱量をどんどんと増していく。

やがて十分に空気を食らいつくしたのか、揺らめきながら炎の柱は人型へとその姿を変化させる。

「うわー……」感嘆の声を漏らすアウラとマール。

「ふふっ……戦ってみるか？」

モモンガの問いに欲しかったおもちゃを与えられた子供のように目を輝かせるアウラ。

(外見は本当に可愛い子供そのものなんだけどなあ…)

そう思うものの実際のところアウラもマールも100レベルのNPCである。

例えモモンガといえども油断すれば命に危険が及ぶ。

「いいんですか!? モモンガ様!」

「構わんよ。ただし怪我のないようにな。」

「はい! ありがとうございます!!」

やったー!!と飛び跳ねて喜ぶアウラの後ろでマールが「ぼ、僕やらなきやいけないことがあったんだっ……」と逃げようとするがそこはアウラが逃がす訳はない。

がっしりとマールを掴まえずるとプライマル・ファイヤーエレメンタルの前まで引きずっていく。

「準備は良いか? アウラ、マール。」

「はい!! いつでも大丈夫です!!」

「……お姉ちゃん、怖いよ、僕……」

対照的な二人の返事。

マールが気の毒のような気もするが、ここは二人の実力を確認するチャンスである為、マールには悪いが戦って貰うことにする。

(すまん、マール……)

「では行くぞ! 行け! プライマル・ファイヤーエレメンタル!!」

モモンガの命令と同時に膨大な熱量を撒き散らしながら双子に襲

いかる。

ゴオオオオ!! つと音を立て灼熱の拳をアウラに放つ。

前衛を務めるアウラは終始笑顔でプライマル・ファイヤーエレメンタルの攻撃を鮮やかにかわすと同時に両手に持った鞭で攻撃を繰り返す。

それと呼吸を合わせるようにマールは補助魔法、そして弱体魔法を唱え姉をサポートする。

「見事な連携ですね。」

「ええ、レベル80後半のモンスター相手にここまで圧倒とは。」

モモンガとおいもは二人の鮮やかな連携が取れた戦い振りを見ながら賛辞を送る。

「じゃ、トドメいくよー! マール!!」

「う、うん! お姉ちゃん!」

アウラの呼びかけに応じ、マールは『グレーターマジック・ストレンジス』を詠唱。

アウラの筋力が大幅に増強され、力がみなぎって来る。

「よおし! じゃバイバイ、楽しかったよ! 『双竜打ち』!!」

『双竜打ち』は単体の敵に対し高確率多段ヒットの物理攻撃スキルである。

さらにマールの魔法により強化されたアウラのこの一撃は凶悪な攻撃力を誇る。

アンファイテアトルムにキイイイインと高音が響き渡りプライマル・ファイヤー・エレメンタルは消滅していく。

「見事だ。アウラ、マールよ。」

モモンガはアウラとマールに賛辞の言葉をかけ、その言葉に賛同するようにおいもも頷く。

「えへへ、ありがとうございます。モモンガ様、おいも様。」

二人は照れながらもどこか誇らしげな様子だ。

「運動して喉が渴いたのではないか?」

モモンガは空中に手を伸ばしアイテムボックスからクリスタルを

磨き上げ、鮮やかな装飾を施したグラスと無限の水差しを取り出し、水を注ぐとそれぞれに手渡す。

「アウラ、マーレ、飲むが良い。」

「え!?! そ、そんな申し訳ないです…モモンガ様から…」

「そ、そうですよ! 水位なら僕の魔法でいくらでも!」

恐縮してなかなか飲む様子のない二人においもは助け舟を出す。

「あれだけの働きを見せてくれたのだ。遠慮する必要はないのだぞ。そうだな…私からはこれをやろう。口に合うといいが。」

アイテムボックスから包みを取り出し微笑みながらアウラとマーレに手渡す。

「ふふ、こんななりをしてるが私は大の甘党でな。それは若干の疲労回復効果も得られるクッキーだ。」

「ありがとうございます! モモンガ様、おいも様!!」  
声を揃え礼を言い、頭を下げる。

「んー! 甘いー!」 「冷たくて美味しいです!」

二人の顔からは終始笑顔が溢れ、それをモモンガもおいもも微笑ましく見つめる。

「モモンガ様もおいも様ももっと恐ろしい方なのかと思ってきました…」

「ん? 恐ろしい方が良かったか? アウラよ。」

モモンガの問いに対してブンブンと頭を横に振るアウラ。

それと同時に「や、優しい方がいいです!」とマーレも答える。

和やかな空気が流れるアンフィテアトルムの右奥から一瞬空間が歪むと数人の影が姿を表す。

「モモンガ様、遅れて申し訳…!! お、おいも様!?!」

そこに現れたのはアウラ、マーレを除く各階層守護者達であった。